

研究区分	教員特別研究推進 地域振興
------	---------------

研究テーマ	壮年期がん療養者の男性配偶者に対する看取り期の訪問看護支援				
研究組織	代表者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	長谷部 美紀
	研究分担者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	林 みよ子
		所属・職名	看護学部・教授	氏名	山田 紋子
		所属・職名		氏名	
	発表者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	長谷部 美紀

講演題目	壮年期がん療養者の男性配偶者に対する看取り期の訪問看護支援
------	-------------------------------

研究の目的、成果及び今後の展望

【目的】わが国の死因1位である悪性新生物（以下がん）の罹患者数は年々増加し、壮年期にあたる30～64歳では約24万人と推計されている。壮年期は社会や家庭内の中心的役割を担う世代であり、多くは罹患後も治療を受けながら役割を遂行している。しかし、余命1か月程度の時期を迎えると身体機能が急激に低下し、介護を引き受ける家族は心身ともに大きな影響を受ける。こうした壮年期のがん療養者と家族に焦点をあて文献検討を行った結果、なかでも男性配偶者は療養者の意思を優先し、自己犠牲の上での介護と役割負担によって健康を損なう可能性が高いことが見出された。一方で看取り期の家族支援については、配偶者の重圧を受けとめることや死別への心の準備を探るなどの訪問看護における支援が明らかにされているが、男性配偶者への支援は十分に検討されていない。男性配偶者への看護支援について検討することは、死別後の男性配偶者の心身の健康に影響する重要な視点であると考えられる。以上のことから本研究の目的は、壮年期がん療養者の看取り期において男性配偶者に対する訪問看護師の支援内容を明らかにし、より効果的な支援への示唆を得ることとした。

【成果および今後の展望】本研究は静岡県立大学研究倫理審査委員会の承認（5-23）後、学長の許可を得て令和7年3月末までを研究期間として実施中の質的記述的研究である。5年以上の看護師経験かつ3年以上の訪問看護経験があることを条件に研究協力者を募集したところ、10名から同意を得、現時点までに9名に半構造化面接を行った。9名の語りを逐語化し、それぞれの語りから、壮年期がん療養者の男性配偶者への支援内容に関する語りを抽出して意味内容を読み取ってまとまりごとにコード化し、現在はサブカテゴリー・カテゴリーを生成中である。今年度の成果として、面接を行なった9名の個人特性と語りの概要を報告する；看護師経験年数は平均27.7年（標準偏差3.9）、このうち訪問看護経験年数は平均12.3年（標準偏差6.8）、面接時間は平均56.3分（標準偏差3.6）であった。訪問看護における壮年期がん療養者と男性配偶者の支援経験は1～40例、壮年期がん療養者の看取り経験は1～70例であった。面接で支援経験として語られた男性配偶者の年齢は30代半ばから60代前半で、療養者のがん種別は子宮がん（3名）、脳腫瘍（2名）、卵巣がん・大腸がん・膵臓がん・盲腸がん（各1名）であった。8名は自宅での看取り、1名は男性配偶者の介護疲れによりホスピスでの看取りであった。面接での語りから、訪問看護師はそれまでの夫婦関係や家族の支援体制など異なる状況にある対象をどう支援すべきか苦慮しながらも、把握した情報から個別性を見出して支援していると推察される。今後はデータ収集と分析を継続し、壮年期がん療養者の看取り期における男性配偶者への訪問看護師の支援内容を質的に明らかにしてより効果的な支援について検討する。